

「嫌悪」の感受性と「神聖さ／純粋さ」という道徳的価値との関係性についての検討

—日本人を対象とした調査から—

青山 美樹 (日本大学 大学院総合社会情報研究科, admi17001@g.nihon-u.ac.jp)

An examination of the relation between disgust sensitivity and the moral value of sanctity/purity:

From a survey of Japanese people

Miki Aoyama (Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University, Japan)

Abstract

Disgust is perceived to be a negative emotion, which restricts or decreases an organism's behaviour to defend the body, mind, and/or social order when exposed to stimuli from the outside world. However, disgust may also lead to behaviours that are advantageous for an organism's survival and thus have value. Moral foundations theory proposes that human moral judgments are based on six inherent criteria, one of which is the moral value of sanctity/purity. This study explores the relation between disgust and sanctity/purity. Most research in this field has been conducted primarily in the United States and in Europe and has yielded contradictory findings. While disgust becomes moralized specifically in the domain of sanctity/purity, it is also related to a wide array of other domains. This study revealed that the disgust displayed by Japanese participants was not associated with sanctity/purity alone but was deeply connected to and affected by relations with others and moral values, namely, loyalty and authority, which emphasize the importance of continued survival and maintaining one's social group.

Key words

disgust, sanctity, purity, moral foundation, moral value

1. はじめに

生物が外界の刺激にさらされたときにとる最も基本的な行動は、「快」「不快」といった原始的な情動に基づく、「接近」と「回避」である(理化学研究所脳科学総合研究センター編, 2019)。いずれも生物が生き延びるために有利な行動をもたらしており、そこには「価値」が生じている(理化学研究所脳科学総合研究センター編, 2019)。

嫌悪(disgust)は、生物の身体的、精神的、社会秩序的な防衛を果たす(今田, 2019)ために、行動を制限、減退させるネガティブな感情(情動)としてとらえられている。嫌悪には、生物における遺伝的基礎を持つ、嫌悪の中核となるコアの嫌悪(core disgust)と、人間行動の動物的側面を想起させる動物性想起の嫌悪(animal reminder disgust)、および、社会・文化規範からの逸脱に対して反応する社会道徳性の嫌悪(social-moral disgust)の3つの層があり(Haidt, Rozin, McCauley, & Imada, 1997; Rozin, Haidt, & McCauley, 2008)、それらは、個体の発達とともに、毒物摂取を回避する身体的防衛(コア嫌悪)から、人間の尊厳を維持する精神的防衛(動物性想起の嫌悪)、そして、社会の安定と秩序の維持を目指す社会秩序防衛(社会道徳性の嫌悪)へと、より高度な機能として段階的に獲得されていく(今田, 2019)と考えられてきた。

Graham, Haidt, Koleva, Motyl, Iyer, Wojcik, & Ditto (2013)が唱える道徳基盤理論では、人間の道徳的判断は6つの基準に基づいており、その一つに「神聖さ sanctity」(また

は「純粋さ purity」)⁽¹⁾という領域があり、さらに、その下位概念のひとつに「嫌悪 disgust」が含まれていると考えられている(Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto, 2011)。神聖さ／純粋さ(sanctity/purity)という道徳的価値はもともと、有害物質や寄生虫、細菌などの生体内への取り込みを回避するという進化的課題と関係し、身体の清浄や汚染についての懸念が個体の性質や行動における純正さに拡大して、身体的・精神的な生き様として、ある種の信念を含有する価値としてとらえられるようになった(Horberg, Oveis, Keltner, & Cohen, 2009)とされている。

Inbar, Pizarro, & Bloom (2009)は、嫌悪(disgust)に対する感受性と、保守的な態度の間には関係性があり、とりわけ中絶や同性婚といった純粋さ(purity)に関する問題と強く関連していることを示した。Horberg et al. (2009)は、怒り(anger)や恐れ(fear)、悲しみ(sadness)といったネガティブな感情ではない、状態や特性としての嫌悪(disgust)が、正義(justice)や危害(harm)や保護(care)ではなく、純粋さ(purity)の領域の侵害において道徳的意義をより増大させていることを示した。一方、Van Leeuwen, Dukes, Tybur, & Park (2017)は、3種類の嫌悪(disgust)が、それぞれ複数の道徳的価値と特定の関係性を示していることを明らかにし、純粋さ(purity)の領域のみならず、より広範な領域に影響を与えていることを示した。嫌悪(disgust)の感受性と、神聖さ／純粋さ(sanctity/purity)という道徳的価値との関係性については、これまで主として欧米人を対象とした研究が行われてきており、結果はさまざま、それらが単なる尺度の違いによるも

のなのか、あるいは社会・文化の違いによるものなのか、未だ検証の途上にあるといえる。本研究では、これらの関係性について、後述する尺度を用いて日本人を対象に検証し、一つの見解を示していくことを目的とした。

2. 先行研究について

2.1 神聖さ／純粋さ (sanctity/purity) という道徳基盤

道徳基盤理論 (Graham et al., 2013) では、人間の道徳的判断は6つの基準に基づいており、それらは道徳基盤として生得的に個体に備わり、道徳的な逸脱場面において直観的な判断をもたらしていると説明されている。現在提案されているのは、「care/harm 保護／危害」(以下、Care という)、「fairness/cheating 公正さ／欺瞞」(以下、Fairness という)、「loyalty/betrayal 内集団への忠誠／裏切り」(以下、Loyalty という)、「authority/subversion 権威への敬意／破壊」(以下、Authority という)、「sanctity/degradation 神聖さ／墮落」(以下、Sanctity/Purity という)、「liberty/oppression 自由／抑圧からの解放」(以下、Liberty という)の6つの基盤である。これらはそれぞれに下位概念を持ち、道徳基盤というものが、さまざまな側面から成る道徳的価値を含有していると説明されている。

Sanctity/Purity の基盤は、人間が「さまざまな汚染環境から集団を防御し、危険を忌避する」という適応的課題から獲得され、異質な食物や性を禁忌し、貞節や欲望を節制することに道徳的価値が置かれているとされている。この基盤の下位概念として、「品位 decency」「嫌悪 disgusting」「神聖 divine」「不快 harmless disgusting」「異常 unnatural」「純潔 chastity」(Graham et al., 2011) が仮定され、これらが Sanctity/Purity という道徳的価値の側面を成していると考えられている。

2.2 道徳性と嫌悪の感情

近年、人間の道徳的な判断、すなわち物事が正しいか間違っているかの直観的な判断に、感情が重要な役割を担っているのではないかと考えられるようになった (e.g., Greene & Haidt, 2003; Haidt, 2001)。Rozin, Lowery, Imada, & Haidt (1999) は、ヒトが有毒物質や汚染物質を忌避するような進化的発展を遂げ、身体や精神を汚染、不潔、劣化から保護するある種のシステムとして働いている感情がすなわち嫌悪 (disgust) であるとした。それによって、不純を「悪」、清浄を「善」としてとらえられるようになった (Horberg et al., 2009) と考えられているのである。

Rozin (1997; 1999) はまた、個人と社会の両方のレベルにおいて、道徳的に中立であった行いが、道徳的な重みを持つ行いに変わっていく、志向から価値への変換プロセスを、道徳化 (moralization) という概念として示し、その過程で感情というものが重要な意味を持ち、そのプロセスおよび内的化を強化していると説明した。さらに Rozin et al. (1999) は、道徳的判断において、異なる感情が異なる道徳的領域の重要性を増幅させるとし、Shweder, Much, Mahapatra, & Park (1997) が示した自律 (autonomy)、共同体 (community)、神性 (divinity) から説明される人

間の道徳律に、それぞれ、怒り (anger)、軽蔑 (contempt)、嫌悪 (disgust) の感情が対応して関係している (CAD triad hypothesis) と主張した。

Horberg et al. (2009) は、この仮説に基づき、神性 (divinity) に対応すると考えられている純粋さ (purity) という道徳律と、嫌悪 (disgust) の感情との関係性をとらえようとした。その結果、他のネガティブな感情ではない、嫌悪 (disgust) の感情が、他の領域ではない、純粋さ (purity) の領域の道徳化を引き起こすことを報告した。

一方、Tybur, Lieberman, & Griskevicius (2009) は、進化的観点から、嫌悪を、病原体に対する嫌悪、配偶者の選択に関する性的嫌悪、社会的相互作用に関する道徳的嫌悪、の3つの領域に分類し、これらが、感染症の回避、長期的な繁殖を危うくする行動やパートナーの回避、社会規範逸脱の回避、という3つの質的に異なる適応課題を解決するように機能していることを実証した。

Van Leeuwen et al. (2017) は、道徳的判断に対する嫌悪の感情の影響は、かつて想定されたほどには大きくない可能性があるとする Landy & Goodwin (2015) の主張を踏まえ、Tybur et al. (2009) の Three-Domain Disgust Scale (TDDS) を用いて、嫌悪の感情と道徳的判断の関係性を改めて検証した。その結果、道徳的嫌悪は、すべての道徳基盤と関係し (なかでも、Fairness に対して最も大きな影響が示された)、性的嫌悪は、Fairness を除くすべての道徳基盤 (なかでも、Purity に対して最も大きな影響が示された)、病原体嫌悪は、Loyalty, Authority, Purity に対して小さいながら影響を及ぼしていた。このことは、嫌悪が病原体回避メカニズムから進化した Sanctity/Purity の道徳基盤に最も深い関係性を示すという予想とは異なり、実際は多元的に道徳基盤と関係しており、その関係性はそれぞれの基盤の機能をも説明しうるものであった (e.g., Chapman & Anderson, 2013; Tybur, Lieberman, Kurzban, & DeScioli, 2013)。Van Leeuwen et al. (2017) では、米国人、英国人、オランダ人、ベルギー人、日本人の標本が用いられ、道徳的嫌悪と性的嫌悪においては、道徳基盤への影響として、米国人、英国人、オランダ人、ベルギー人では同様の結果が示されたが、病原体嫌悪については、米国人、英国人に限定される結果であったと報告されている。

Steiger & Reyna (2017) が米国人を対象に、Izard, Libero, Putnam, & Haynes (1993) の Trait Disgust Scale (特性嫌悪尺度) を用いて行った結果からも、特性嫌悪が、特に、危害／保護や互惠性の領域に関連づけられ、Purity 以外の領域とも強く関連していることが示された。さらに、改訂嫌悪尺度 (Disgust Scale-Revised; 以下、DS-R という; Haidt, McCauley, & Rozin, 1994; Olatunji, Williams, Tolin, Abramowitz, Sawchuk, Lohr, & Elwood, 2007; Olatunji, Haidt, McKay, & David, 2008) を用いた結果からも、6つの道徳的価値のすべてと有意に関連し、特性嫌悪が Purity の領域と特異的な関係性を持っているとした先行研究 (e.g., Horberg et al., 2009; Rottman, Kelemen, & Young, 2014) とは異なる結果が示された。Steiger & Reyna (2017) では2つの異なる尺度 (Izard's

Trait Disgust ScaleとDS-R)を用いており、尺度の違いによってとらえられる概念が異なり、結果も異なっている可能性が示唆された。

一方、Wagemans et al. (2018) がオランダ人を対象に、DS-R や MFQ などいくつかの尺度を用いて行った5つの調査からは、嫌悪の感受性がPurityに基づく道徳的判断に、一貫して強い連関を示していたと報告された。

このように、嫌悪の感受性と道徳的な判断や態度との関係性において、嫌悪の感受性がSanctity/Purity、Authority、Loyalty、Care、Fairness、Libertyの全ての道徳的領域と等しく連関しているとする見方と、主として特定の道徳的領域(たとえばSanctity/Purity)と連関しているとする見方があった(Wagemans, Brandt, & Zeelenberg, 2018)。

3. 方法

3.1 調査対象

本研究の標本は、18歳以上60歳以下の、日本で生まれ育った日本人500人で、調査の実施・データ収集を委託した都内の調査会社に登録されている日本全国の100万人超のモニターから、男女比、年齢層比が平均化されるように、無作為に抽出された。

3.2 実施の手続き

調査は、2020年5月29日～31日にオンライン調査として実施し、マトリックス形式の調査票にそれぞれ評定法で選択回答させた。

3.3 調査票

フェイスシートでは、性別(男/女の2択)、年齢層(18～20歳/21～30歳/31～40歳/41～50歳/51～60歳の5択)、政治的な考え方(保守主義的/やや保守主義的/やや自由主義的/自由主義的/どちらでもない、の5段階評定)を確認した。

改訂嫌悪尺度(Disgust Scale-Revised; DS-R)は、中核的嫌悪(12項目)、動物性嫌悪(8項目)、汚染嫌悪(5項目)の3つの概念(合計25項目)から個体の嫌悪の感受性を測る尺度である。日本語版(Japanese version of the Disgust Scale-Revised; 以下、DS-R-Jという)は岩佐・田中・山田(2018)によって検証され、7項目が除外されて、2つのパートを合わせ18項目で構成されている(付録1)。本研究では、各パートに1問ずつ操作チェックを加えた。最初のパートは、「以下の文章を読んで、それぞれの文章が自分にどの程度当てはまるかを、1:全く当てはまらない、から、5:とても当てはまる、までで評定してください」という問いに続き、各項目を5段階で評価させた。次のパートでは、「以下のような経験によって、どの程度嫌悪感(嫌な気持ち)を感じるか、1:全く嫌な気持ちにならない、から、5:極度に嫌な気持ちになる、までの間で評価してください」という問いに続き、各項目を5段階で評価させた。そして、操作チェックの2項目を除く各項目の得点を3つのカテゴリ毎に合算して平均得点を算出した。

モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア(Moral

Foundations Questionnaire; 以下、MFQという; Graham et al., 2011)は、道徳基盤理論の構成概念(本調査票のなかでは5つの道徳基盤を仮定)をとらえる調査票として作成された。本研究で用いた日本語版MFQは、金井版(金井, 2015)の和訳の一部を本人および原著者のGrahamとHaidtの許可を得て著者が変更したものである(付録2)。MFQは、第一部の「Relevant道徳との関連度」の15項目(以下、MFQ1という)と、第二部の「Judgment道徳的判断」の15項目(以下、MFQ2という)で構成され、各項目群に1問ずつ操作チェックが加えられている。MFQ1では、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するときに、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか」という問いに続き、各項目について「1:まったく関係しない(判断にまったく無関係)」から「6:極めて関係する(判断に最も重要)」の6段階で評価させた。MFQ2では、「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかを、以下の6段階から選んでください」という問いに続き、各項目について「1:まったく同意しない」から「6:非常に同意する」の6段階で評価させた。そして、操作チェックの2項目を除き、各パートの15項目の得点を5つのカテゴリ毎に合算して平均得点を算出した。

日本語版モラル・ファンデーションズ・ビネット(Moral Foundations Vignettes; 以下、MFVsという; Clifford, Iyengar, Cabeza, & Sinnott-Armstrong, 2015; 青山, 2016)は、MFQではとらえられない直観的な道徳的判断を生起させることが目指された調査票である。本研究ではMFQの補助的な調査票として用いた。日本語版MFVsも道徳基盤理論の概念構造に基づいているが、その構造はMFQとは若干異なり、Care(弱者weak)(5項目)、Care(危害harm)(5項目)、Fairness(4項目)、Liberty(5項目)、Loyalty(5項目)、Sanctity(4項目)の6つの領域から合計28項目で構成されている(付録3)。「次にあげるシナリオを実際あなたが目にしている光景として想像してください。そのうえで、それらの行為を以下の5段階で評価してください。」という問いに続き、それぞれのシナリオが描写している第三者の態度を「1:まったく悪くない」から「5:極めて悪い」の5段階で評価させた。そして、各項目の得点をカテゴリ毎に合算して平均得点を算出した。

調査票は、フェイスシート、MFVs、MFQ、DS-R-Jの順番で提示し、同じカテゴリが続かないよう、また、それぞれの項目を無作為に提示して、順序効果を回避した。

3.4 検証の手続き

まず、MFQの5因子、MFVsの6因子と、DS-R-Jの3因子について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した(検証1)。

次に、MFQの全ての項目(30の下位項目)と、DS-R-Jの3因子について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した(検証2)。

4. 結果

まず、MFQの2問の操作チェックから、500のデータのうち82のデータを無効⁽²⁾とした。さらに、DS-R-Jの2問の操作チェックから145のデータを無効⁽³⁾とし、残りの273のデータを採用した。

4.1 検証1

検証1の結果を表1に示す。中核的嫌悪の因子は、MFQ、MFVsの全ての道徳基盤領域と有意な相関を示し、相対的にみてMFQではSanctity/Purityの領域との相関が最も高く、MFVsではLiberty、Loyalty、Sanctity/Purityとの相関が高かった。

一方、動物性嫌悪の因子は、MFQのLoyaltyの領域との低い相関を示したのみで、他の領域との相関はほとんど示さなかった。

汚染嫌悪の因子では、MFQ、MFVsともに、LoyaltyとSanctity/Purityの領域に低い相関を示したものの、他の領域との相関はほとんど示さなかった。

4.2 検証2

検証2の結果を表2に示す。検証1では、中核的嫌悪の因子は、MFQのCareを除く全ての道徳的判断領域と正の相関を示していたが、さらに詳細にMFQの下位概念との関係をみていくと、Fairnessの領域では、「裕福 rich」の領域にのみ低い相関を示し、Loyaltyの領域では、「裏切り betray」「忠誠 loyalty」「チーム team」に、Authorityの領域では、「敬意 respect」「伝統 traditions」「尊敬 kid respect」に、Sanctity/Purityの領域では、「品位 decency」「不快 harmless disgusting」「異常 unnatural」「純潔 chastity」にのみ低い相関を示し、そのなかでは、「忠誠 loyalty」の領域に相対的にみて最も高い相関を示していた。

動物性嫌悪の因子は、Loyaltyの領域の「忠誠 loyalty」「チーム team」、Authorityの領域の「伝統 traditions」にのみ、それぞれ低い相関を示していた。

汚染嫌悪の因子は、Loyaltyの領域の「忠誠 loyalty」、

Authorityの領域の「敬意 respect」「伝統 traditions」「尊敬 kid respect」にのみ、それぞれ低い相関を示し、検証1では低い相関がみとめられたSanctity/Purityの領域では、いずれの下位概念ともほとんど相関は示さなかった。

5. 考察

検証1の結果、嫌悪の3領域（中核的嫌悪、道徳的嫌悪、汚染嫌悪）は、それぞれ異なる道徳基盤領域と関連していることが示された。中核的嫌悪は、複数の幅広い道徳基盤領域と関連し、そのなかで、特にSanctity/Purityの領域、またLoyaltyやAuthorityの領域との相関が相対的にみて高かった。動物性嫌悪は、Loyaltyの領域以外には相関を示さず、汚染嫌悪も、LoyaltyとSanctity/Purityの領域のみに低い相関を示していた。Van Leeuwen et al. (2017)がTDDSを用いて行った調査では、道徳的嫌悪はすべての道徳基盤と、また性的嫌悪もFairnessを除くすべての道徳基盤と正の相関を示し、病原体嫌悪は、Loyalty、Authority、およびSanctity/Purityと正の相関を示していた。これらの2つの調査を比較すると、中核的嫌悪はVan Leeuwen et al. (2017)の道徳的嫌悪と、汚染嫌悪はVan Leeuwen et al. (2017)の病原体嫌悪とある程度対応しているとみることができ、同様の領域をとらえているのではないかと考えられた。一方、Van Leeuwen et al. (2017)では、性的嫌悪が、病原体嫌悪よりもSanctity/Purityの領域により高い関係性を示し、Sanctity/Purityの基盤が、感染症に関する懸念よりも生殖に関する懸念に基づいていることが示唆されていた。本研究でとらえられた動物性嫌悪は、Van Leeuwen et al. (2017)の性的嫌悪とは異なり、Loyalty以外のいずれの領域にも関係性を示さなかった。このことから、動物性嫌悪と性的嫌悪が同じ領域をとらえていない可能性が示唆された。

検証2の結果からは、嫌悪の3領域は、MFQのLoyaltyの下位概念「忠誠 loyalty」や、Authorityの下位概念「敬意 respect」や「伝統 traditions」とのより強い関係性を示していた。この結果からは、想定されていたような嫌悪

表1：道徳基盤と嫌悪の3領域の相関

	道徳基盤	中核的嫌悪	動物性嫌悪	汚染嫌悪
MFQ	Care	.153*	.108	.104
	Fairness	.227**	.109	.129*
	Loyalty	.269**	.212**	.208**
	Authority	.275**	.167**	.194**
	Sanctity/Purity	.315**	.166**	.214**
MFVs	Care (weak)	.282**	.018	.125*
	Care (harm)	.163**	-.049	.031
	Fairness	.224**	.042	.131*
	Liberty	.311**	-.005	.054
	Loyalty	.396**	.150*	.210**
	Sanctity/Purity	.316**	.160**	.218**

注：** $p < .01$; * $p < .05$.

表 2：道徳基盤の下位概念と嫌悪の3領域の相関

項目 No.	道徳基盤	下位概念	中核的嫌悪	動物性嫌悪	汚染嫌悪	
q1	Care	Emotionally	精神	.040	.021	.006
q2		Weak	弱者	.105	.051	.073
q3		Cruel	残虐	.095	.042	.056
q16		Compassion	思いやり	.181**	.117	.095
q17		Animal	動物	.114	.011	.128*
q18		Kill	殺人	.075	.152*	.059
q4	Fairness	Treated	待遇	.100	.070	.099
q5		Unfairly	不当	.159**	.063	.053
q6		Rights	権利	.053	-.021	.015
q19		Fairly	公平	.092	.010	.038
q20		Justice	正義	.190**	.109	.066
q21		Rich	裕福	.212**	.145*	.169**
q7	Loyalty	Love country	愛国	.148*	.138*	.149*
q8		Betray	裏切り	.251**	.142*	.187**
q9		Loyalty	忠誠	.312**	.204**	.247**
q22		History	歴史	.045	.080	-.030
q23		Family	家族	.035	.031	.047
q24		Team	チーム	.222**	.212**	.181**
q10	Authority	Respect	敬意	.262**	.156**	.217**
q11		Traditions	伝統	.272**	.204**	.201**
q12		Chaos	無秩序	.063	.041	.006
q25		Kid respect	尊敬	.220**	.145*	.214**
q26		Sex roles	性役割	.100	.024	.020
q27		Soldier	兵士	.126*	.062	.070
q13	Sanctity/Purity	Decency	品位	.218**	.164**	.172**
q14		Disgusting	嫌悪	.149*	.045	.123*
q15		Divine	神聖	.177**	.111	.181**
q28		Harmless disgusting	不快	.248**	.074	.085
q29		Unnatural	異常	.223**	.134*	.107
q30		Chastity	純潔	.243**	.117	.154*

注：** $p < .01$; * $p < .05$.

(disgust) と Sanctity/Purity の領域の特定の関係性は示されず、嫌悪というものが、「さまざまな汚染環境から集団を防御し、危険を回避する」ために獲得されてきた Sanctity/Purity の基盤と、同等かむしろそれ以上に、「集団への脅威に対処するために結束する」ために獲得されてきた Loyalty の基盤や、「階層社会のなかで有利な協力関係を形成する」ために獲得されてきた Authority の基盤とも深く関連していることが示されていた。

Steiger & Reyna (2017) が述べているように、嫌悪の感情と道徳基盤領域の関係性は、用いた尺度によってとらえられている側面が異なり、結果が大きく変わってくると考えられる。Tybur et al. (2009) が分類した嫌悪の3つの領域(病原体嫌悪、性的嫌悪、道徳的嫌悪)と、Haidt et al. (1994) や Olatunji et al. (2008) が分類した、中核的嫌悪、動物性嫌悪、汚染嫌悪の3つの概念は、それぞれ

重なり合う部分はあるものの、単純に比較することはできない。これらの分類の正しさについては、今後のさらなる研究によって明らかにされていくであろう。

また、本研究のなかでは、嫌悪の3領域における、政治的志向、性別、年齢層による有意差についても検証した。政治的な志向による有意な違いは、動物性嫌悪 $F(4, 268) = 2.84, p < .05$ 、汚染嫌悪 $F(4, 268) = 3.37, p < .05$ でみとめられたが、中核的嫌悪 $F(4, 268) = 1.01, p = .40$ ではみとめられなかった。性別では、全体として男性よりも女性のほうが平均値が高い傾向がみられ、そのうち中核的嫌悪 $F(1, 271) = 15.10, p < .001$ 、汚染嫌悪 $F(1, 271) = 5.33, p < .05$ で有意な違いがみとめられたが、動物性嫌悪 $F(1, 271) = 0.11, p = .74$ ではみとめられなかった。年齢層では、中核的嫌悪 $F(4, 268) = 2.33, p = .06$ 、動物性嫌悪 $F(4, 268) = 0.30, p = .88$ 、汚染嫌悪 $F(4, 268) = 1.68, p = .15$ 、のいずれにお

いても有意な違いはみとめられなかった。

これまでの検証から、嫌悪の感情が多面的な領域から説明され、それらは道徳的判断において異なる複数の道徳基盤領域に関連していることが改めて示された。また、日本人においては、中核的嫌悪は政治的な志向や年齢に関係なく、動物性嫌悪は性別や年齢に関係なく、汚染嫌悪は年齢に関係なく、個人の道徳的判断に影響を与えている可能性が示唆された。一方で、嫌悪に対する感受性の強さと、道徳基盤領域への依拠の強さとの関係は、最も結びつきが強いと想定されていた Sanctity/Purity の領域だけでなく、むしろそれ以上に、Loyalty や Authority の領域と強く結びついており、嫌悪の感情というものが、日本人においては、他者との関係性や、自らが所属する集団の防衛や維持に関する問題に対して、より強い影響を与えている可能性があることが示唆された。

6. 結語

さまざまな生物にみられる病原体からの個体の防御とリスクの回避、繁殖に関するより健康な配偶者選択といった行動パターンは、ある種のメカニズムとしてあり (Schaller, 2006)、行動免疫システム (Schaller, 2011; Schaller & Park, 2011) と呼ばれている。それは、生物に生得的に備わる遺伝的な要素と、外界からの強い刺激によって、進化的に獲得された行動特性であり、究極的には個体の生存と繁殖を有利にしている傾向性であるとされている。人間においても、知覚的な手がかりから感染リスクを推測し、感情的 (嫌悪の覚醒など)、認知的 (認知の活性化など)、行動的 (行動回避など) な反応を生起させ、社会的認知や社会的行動に重要な影響を与えている (Schaller & Duncan, 2007; Schaller, 2011) と考えられている。道徳的価値とはこのような心理的進化の延長線上にあると考えることができる。

人間はこうした傾向性を獲得したことによって、入植者や異常な性的嗜好を持つ者など、新しい課題に対しても道徳的な反応を強化してきた (Faulkner, Schaller, Park, & Duncan, 2004; Navarrete & Fessler, 2006; Rozin et al., 2008) と考えられ、このような道徳的な動機づけを生起させている基盤領域を Sanctity/Purity として仮定してきた。そして、嫌悪 (disgust) という強力な適応的課題に対するある種の適応的結果 (Oaten, Stevenson, & Case, 2009; Rozin et al., 2008) が、Sanctity/Purity という道徳基盤領域と特に深い結びつきを持っていると考えられてきたのである。

本研究の結果から、嫌悪 (disgust) がより強い影響を与えていたのは、Sanctity/Purity の領域だけではなく、Loyalty や Authority という社会との結びつきに価値を置く領域でもあった。病原体の脅威に対して人間は、内集団内の凝集性を高め、逆に外集団に対して否定性を高めることで感染のリスクを軽減しようとする傾向がある (Faulkner et al., 2004; Navarrete & Fessler, 2006) と考えられているように、人びとは社会集団との関係性をより重要なものとして認知している可能性が示された。

そのなかで、本研究の結果は、欧米人とは異なる日本

人に特徴的な志向があった可能性も示唆された。道徳感情の影響は、用いる尺度や方法によって結果が大きく変わってくる (Steiger & Reyna, 2017) ため単純には比較はできないが、日本人の判断には、他者や社会との関わりや、自然との結びつきを普遍的な次元でとらえるような道徳的思考がある (日本道徳性心理学研究会編, 1992, p.65) と考えられているように、感情というものが、より社会的な意義と結びついて生じている可能性があると考えられた。また、青山 (2019) では、5つの道徳基盤領域のうち Sanctity/Purity は、他の領域と比較して比較的高い平均得点を示し、道徳的価値としての Sanctity/Purity への依拠が、米国人と比較して平均して高く、Loyalty、Authority といった外的な動機よりも、Care、Fairness といった内的な動機により近いものであったことが示されていた。このことから、日本人においては、嫌悪の感情のなかでも中核的嫌悪というコアの領域が Sanctity/Purity という、より内的な動機を含む幅広い領域に影響を与え、一方、動物性嫌悪や汚染嫌悪の領域は、Loyalty や Authority といった社会的な意義を含む道徳性に、より影響を与えている可能性があると考えることができた。Van Leeuwen et al. (2017) でも、病原体嫌悪においては国によって異なる結果が示されていたように、社会・文化の違いによって異なる嫌悪 (disgust) の意義と、その影響を受ける異なる領域があるのではないかと考えられた。

本研究の結果から、嫌悪 (disgust) の感情が個体の肉体的・精神的な安全のみならず、その個体が生きる社会・文化の存続により高い価値を置く、適応的動機によって引き起こされ、善悪の判断をもたらしている道徳感情であることが示された。それは、個体が生物としての単一的な存在から、社会環境の一部としての相互依存的な存在として、自らが生きる世界に適応するなかで進化させてきた心理的機能であり、ネガティブな感情でありながら、個体とその集団に迫る脅威に対し、特に人びとを結び付け、適切な社会的行動をもたらし、集団の維持・存続を可能にしてきたと考えることができるのではないだろうか。

謝辞

本論文を作成するにあたり、熱心にご指導賜りました田中堅一郎教授に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 「純正さ・神聖さ (Sanctity)」は当初、Graham et al. (2011) では「純粋さ (Purity)」と呼ばれ、そのため多くの先行研究でも「純粋さ (Purity)」として説明されている。本稿のなかではこれらを併用していく。
- (2) 先行研究に倣い、MFQ1 では、「数学が得意であったかどうか」という問いに対し、「5: とても関係する」「6: 極めて関係する (判断に最も重要)」という“強く”「関係する」とする評価を与えた回答を切り捨て、MFQ2 では、「悪い行いよりは良い行いをしたほうがよいに決まっている」という問いに対し、「1: まったく同意しな

い」「2: あまり同意しない」「3: どちらかといえば同意しない」という3つのレベルの「同意しない」という評価を与えた回答を切り捨てた。

- ⁽³⁾ 先行研究に倣い、最初のパートでは、「紙切れよりも果物を一切れ食べたい」という内容に、「1: 全く当てはまらない」「2: あまり当てはまらない」「3: どちらとも言えない」という回答、次のパートでは、「りんごをナイフとフォークで食べている人を見る」という内容に、「3: やや嫌な気持ちになる」「4: とても嫌な気持ちになる」「5: 極度に嫌な気持ちになる」という回答を切り捨てた。

引用文献

- 青山美樹 (2016). 道徳的基盤に関する調査票の日本語版の作成と妥当性および信頼性の検討. 日本大学大学院総合社会情報研究科修士論文 (未公刊).
- 青山美樹 (2019). 日本人の観念形態を探る心理学的アプローチ—道徳基盤理論における道徳性と政治的志向性の考え方に基いて—. 国際情報研究, 16, 12-23.
- Chapman, H. A. & Anderson, A. K. (2013). Things rank and gross in nature: A review and synthesis of moral disgust. *Psychological Bulletin*, 139, 300-327.
- Clifford, S., Iyengar, V., Cabeza, R., & Sinnott-Armstrong, W. (2015). Moral foundations vignettes: A standardized stimulus database of scenarios based on moral foundations theory. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 1178-1198.
- Faulkner, J., Schaller, M., Park, J. H., & Duncan, L. A. (2004). Evolved disease-avoidance mechanisms and contemporary xenophobic attitudes. *Group Processes & Intergroup Relations*, 7, 333-353.
- Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. (2013). Moral foundations theory: The pragmatic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55-130.
- Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 366-385.
- Greene, J. & Haidt, J. (2003). How (and Where) Does moral judgment work? *Trends in Cognitive Sciences*, 6, 517-523.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108, 814-834.
- Haidt, J., McCauley, C., & Rozin, P. (1994). Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.
- Haidt, J., Rozin, P., McCauley, C. R., & Imada, S. (1997). Body, psyche and culture: The relationship between disgust and morality. *Psychology and Developing Societies*, 1, 107-131.
- Horberg, E. J., Oveis, C., Keltner, D., & Cohen, A. B. (2009). Disgust and the Moralization of Purity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 963-976.
- 今田純雄 (2019). 嫌悪感情の機能と役割 1—Paul Rozin の研究を中心に—. エモーション・スタディーズ, 4, Special Issue, 39-46.
- Inbar, Y., Pizarro, D. A., & Bloom, P. (2009). Conservatives are more easily disgusted than liberals. *Cognition and Emotion*, 23, 714-725.
- Izard, C. E., Libero, D. Z., Putnam, P., & Haynes, O. M. (1993). Stability of emotion experiences and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 847-860.
- 岩佐和典・田中恒彦・山田祐 (2018). 日本語版嫌悪尺度 (DS-R-J) の因子構造, 信頼性, 妥当性の検討. 心理学研究, 89, 82-92.
- 金井良太 (2015). 脳に刻まれたモラルの起源—人はなぜ善を求めるのか—. 岩波書店.
- Landy, J. F. & Goodwin, G. P. (2015). Does incidental disgust amplify moral judgment?: A meta-analytic review of experimental evidence. *Perspectives on Psychological Science*, 10, 518-536.
- Navarrete, C. D. & Fessler, D. M. T. (2006). Disease avoidance and ethnocentrism: The effects of disease vulnerability and disgust sensitivity on intergroup attitudes. *Evolution and Human Behavior*, 27, 270-282.
- 日本道徳性心理学研究会 (編著) (1992). 道徳性心理学—道徳教育のための心理学—. 北大路書房.
- Oaten, M. J., Stevenson, R., & Case, T. I. (2009). Disgust as a disease-avoidance mechanism. *Psychological Bulletin*, 135, 303-321.
- Olatunji, B. O., Haidt, J., McKay, D., & David, B. (2008). Core, animal reminder, and contamination disgust: Three kinds of disgust with distinct personality, behavioral, physiological, and clinical correlates. *Journal of Research in Personality*, 42, 1243-1259.
- Olatunji, B. O., Williams, N. L., Tolin, D. F., Abramowitz, J. S., Sawchuk, C. N., Lohr, J. M., & Elwood, L. S. (2007). The disgust scale: Item analysis, factor structure, and suggestions for refinement. *Psychological Assessment*, 19, 281-297.
- 理化学研究所脳科学総合研究センター (編) (2019). 脳科学の教科書 (こころ編). 岩波書店.
- Rottman, J., Kelemen, D., & Young, L. (2014). Tainting the soul: Purity concerns predict moral judgments of suicide. *Cognition*, 130, 217-226.
- Rozin, P. (1997). Moralization. In A. M. Brandt & P. Rozin (eds.), *Morality and health* (pp. 379-401). Taylor & Frances/Routledge.
- Rozin, P. (1999). The process of moralization. *Psychological Science*, 10, 218-221.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2008). Disgust. In M. Lewis, & J. Haviland (eds.), *Handbook of emotions* (3rd ed., pp. 757-776). New York: Guilford.
- Rozin, P., Lowery, L., Imada, S., & Haidt, J. (1999). The CAD triad hypothesis: A mapping between three moral emotions (contempt, anger, disgust) and three moral codes (community,

- autonomy, divinity). *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 574-586.
- Schaller, M. (2006). Parasites, behavioral defenses, and the social psychological mechanisms through which cultures are evoked. *Psychological Inquiry*, 17, 96-101.
- Schaller, M. (2011) The behavioral immune system and the psychology of human sociality. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, 366, 3418-3426.
- Schaller, M. & Duncan, L. A. (2007). The behavioral immune system: Its evolution and social psychological implications. In J. P. Forgas, M. G. Haselton, & W. von Hippel (eds.). *Evolution and the social mind: Evolutionary psychology and social cognition* (pp. 293-307). New York: Psychology Press.
- Schaller, M. & Park, J.H. (2011). The behavioral immune system (and why it matters). *Current Directions in Psychological Science*, 20, 99-103.
- Shweder, R. A., Much, N. C., Mahapatra, M., & Park, L. (1997). The “Big Three” of morality (autonomy, community, and divinity) and the “Big Three” explanations of suffering. In A. Brandt & P. Rozin (eds.), *Morality and health* (pp. 119-167). New York, NY: Routledge.
- Steiger, R. L. & Reyna, C. (2017). Trait contempt, anger, disgust, and moral foundation values. *Personality and Individual Differences*, 113, 125-135.
- Tybur, J. M., Lieberman, D., & Griskevicius, V. (2009). Microbes, mating, and morality: Individual differences in three functional domains of disgust. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 103-122.
- Tybur, J. M., Lieberman, D., Kurzban, R., & DeScioli, P. (2013). Disgust: Evolved function and structure. *Psychological Review*, 120, 65-84.
- Van Leeuwen, F., Dukes, A., Tybur, J. M., & Park, J. H. (2017). Disgust sensitivity relates to moral foundations independent of political ideology. *Evolutionary Behavioral Sciences*, 11, 92-98.
- Wagemans, F. M. A., Brandt, M., & Zeelenberg, M. (2018). Disgust sensitivity is primarily associated with purity-based moral judgments. *Emotion*, 18, 277-289

(受稿：2020年10月30日 受理：2020年12月14日)

付録1 日本語版嫌悪尺度 (DS-R-J)

(CD：中核的嫌悪、AR：動物性嫌悪、CO：汚染嫌悪)

- Q1 AR 科学の授業中、ビン詰め状態で保存状態にされている人間の手を見ると気持ち悪くなるだろう。
- Q2 AR 目からガラス製の眼球を取り出す人がいても、全くうろたえないだろう。(R)
- Q3 AR 死体にさわると、強い嫌悪感をおぼえるだろう。
- Q4 CO 墓場を避けて通れるように、わざわざ遠回りをするだろう。
- Q5 CO 公衆トイレの便座には、身体の一部たりとも触れたくない。
- Q6 CO 大好きなレストランでも、コックが風邪をひいていたら、おそらく行かないだろう。
- Q7 CO どんな立派なホテルでも、前日にその部屋で心臓発作によって誰かが亡くなったと知ったら、そこで眠る事によってイヤな気持ちになるだろう。
- Q8 CD 誰かがバニラアイスの上にケチャップをかけて食べているのを見る。
- Q9 CD 牛乳を飲もうとして、腐ったにおいがした。
- Q10 CD 屋外に置いてあるゴミ箱の中で、肉の上にウジ虫がいるのを見た。
- Q11 CD コンクリートの上を裸足で歩いていて、ミミズを踏む。
- Q12 CD 線路下のトンネルを通るときに、尿のにおいがした。
- Q13 CD 友達が週に1回しか下着を替えないと分かった。
- Q14 CD 友達が犬の糞の形をしたチョコレートすすめてきた。
- Q15 CD 性教育の授業で、潤滑剤を塗ってある新品のゴム製コンドームを、口で膨らませないといけない。
- Q16 AR 事故にあつて腸がはみ出た男性を見た。
- Q17 AR 友達が飼っている猫が死んで、あなたはその死体を素手で持たないといけない。
- Q18 CO うっかり、火葬された人の遺灰に触ってしまった。

付録2 日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (MFQ)

(C：Care、F：Fairness、L：Loyalty、A：Authority、S：Sanctity)

第一部 道徳的判断の基準 (MFQ1)

- Q1 C 誰かが精神的に傷ついたかどうか
- Q2 C 弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか
- Q3 C その人が残虐であったかどうか

- Q4 F 一部の人が他とは違う扱いを受けていたかどうか
 Q5 F 不当な行動をとっていたかどうか
 Q6 F 誰かの権利がないがしろにされていたかどうか
 Q7 L 行動に自国への愛があったかどうか
 Q8 L 自分の所属するグループに対する裏切り行為があったかどうか
 Q9 L その人の行動が忠誠心に欠けていたかどうか
 Q10 A 権威に対する敬意が欠落していたかどうか
 Q11 A 社会の伝統的なしきたりに従っていたかどうか
 Q12 A ある行動によって、無秩序や混乱が生じたかどうか
 Q13 S 純粋さや品位の一般的基準に違反しているかどうか
 Q14 S 嫌悪をもよおすようなことをしたかどうか
 Q15 S 天罰が下るような行動だったかどうか

第二部 道徳原理への是認 (MFQ2)

- Q16 C 苦しんでいる人や困っている人への思いやりの念とは最大の美德である
 Q17 C 無防備な動物を傷つけることは、人間として最低な行動だ
 Q18 C 人間を殺すことは、どのような状況においても正当化できない
 Q19 F 政府が法律を作る際、一番重要視されるべきことは、すべての人が公平な扱いをうけることだ
 Q20 F 正義とは社会にとって、必要とされる大切なものだ
 Q21 F 裕福な家庭に生まれた子どもが、たくさんのお金を相続し、貧乏な家庭の子どもは何も相続しないというのは、道義に反すると思う
 Q22 L 私は自分の国の歴史を誇りに思う
 Q23 L たとえ家族の誰かが間違いを犯したとしても、家族を大切にすることを続けるべきだ
 Q24 L 自己表現することよりも、チームプレイヤーとして働くことの方が重要である
 Q25 A 子どもたちは皆、権威を敬うことの大切さを教わるべきだ
 Q26 A 男性と女性には、それぞれ社会の中で異なる役割がある
 Q27 A もし私が兵士ならば、上官の命令に納得がいかなくとも、それは自分の義務であるのだから、その命令に従うだろう
 Q28 S たとえ誰も傷つかないとしても、不快極まるような行動をとるべきではない
 Q29 S 自然の摂理に反するような行動は間違っている
 Q30 S 貞節は重要で価値のある道徳的美点である

付録3 日本語版モラル・ファンデーションズ・ビネット (MFVs)

(W : Care (weak)、H : Care (harm)、F : Fairness、V : Liberty、L : Loyalty、S : Sanctity)

- Q1 W すれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている人がいる
 Q2 W 知り合いの父親が清掃作業員だと知って嘲笑している人がいる
 Q3 W 治療で髪が抜け落ちた患者を見て忍び笑いをしている人がいる
 Q4 W 会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚のプレイを見て面白がっている人がいる
 Q5 W 車椅子に乗っている人に向かって「邪魔だ」と言っている人がいる
 Q6 H 食事が運ばれてくるのが遅いという理由でウェイターにコップを投げつけている人がいる
 Q7 H アパートの上の階から無差別に通行人に向かって瓶を投げつけている人がいる
 Q8 H 道路にワイヤーを仕掛けて自転車で通りがかった人が横転するのを楽しんでいる人がいる
 Q9 H 邪魔だと言ってよちよち歩きの子どもの足を蹴飛ばしている若い親がいる
 Q10 H むしゃくしゃすると見知らぬ通行人をいきなり殴っている人がいる
 Q11 F 自分がひいきにしているチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる
 Q12 F 自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる
 Q13 F 地域の自治会で集めた会費を無断で自分の買い物に使っている人がいる
 Q14 F バスを降りるとき乗車運賃を支払わずに走って逃げていく人がいる
 Q15 V 自分が所属する政党に鞍替えするよう婚約者に求めている人がいる
 Q16 V 自分のような民間航空会社のパイロットになるよう息子に要求している父親がいる
 Q17 V 有名なニュース番組のキャスターになるよう子どもに圧力をかけている親がいる

- Q18 V 大学の医学部に進学するよう子どもに強制している親がいる
- Q19 V 自分の理想とするパートナーになるよう婚約者に言い聞かせている人がある
- Q20 L 数学の全国競技大会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる
- Q21 L 海外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている日本人の大使がいる
- Q22 L 外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる
- Q23 L インターネットで日本人を辱めるような作り話を発信している日本人がいる
- Q24 L 日本人よりも他国民の幸せのために働くと言っている日本人の外交官がいる
- Q25 S 夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為をしている男性がいる
- Q26 S インターネットで動物と性交している人達を鑑賞して楽しんでいる人がある
- Q27 S 動物が死んでいくときに強い性的興奮を覚えると言っている人がある
- Q28 S 昔から食べてはいけないと言われていた人間の肉をこっそり食べている人がある
-